

ごめんネ

樋口真子

静岡県・三六・主婦

初めてデートした日、男の人にしてはきれいな手をしているなあ、と思った。面と向かっておしゃべりするのが恥ずかしくて、その長くて細い指をちらちらと眺めてた。知らなかったでしょ？ それから、いつも、どこに行くにも手をつないでいたね。歩き始めると、何気なしにそっと手を取ってくれる。そのたび私は胸がドキンとなって、つないだ手の温もりが全身に伝わってくるのを感じながら、ずっとこのままでいたいなって思ってた。

そして結婚。子供が生まれ、あなたが病気になって生活に追われるうち、手を握り合う、なんてことなくなってしまった。

何度目かの入院の時、私が帰ろうとすると、珍しくあなたは、帰らないでと言うふうに、右手を差し出した。その時、もう一度座り直して両手でその手を撫でながら、ほんとは何年ぶりにあなたの手をじっと見つめ、触れたことに気づいたの。初めて見

た時の手とは違う、変形してしまっている指、でも、ほのかな温もりだけは変わらなかった。

何も言わないあなた。でも、顔が「ごめん」と言っているのが分かって、切なかったな。

あの日家に帰ってから、ぼろぼろ泣けて仕方なかった。きっと謝らなければいけないのは私の方。不満ばかりを募らせて、この頃はいつもつまらない顔をしたものね。……ごめんネ。

あなたの手が、忘れてはいけないうるものを取り戻してくれた。私はまだ、あなたのことを愛している！

今度あなたの調子の良い時に、またあの時のように手をつないで散歩しようね。そうしたらこれからもずっと、あなたと一緒にがんばっていける気がする。

ネッ、いいでしょう？